

一般 寄稿

社会情報学科

孤独になれない—教員の夢



廣重 剛史

Takeshi HIROSHIGE

社会学部社会情報学科准教授

1 研究日に「教育」について考える

「教育」について論ずるなど、実家の母が聞いたらどう思うだろうか？ 想像するに、おそらく「何を偉そうに。あんたが教育されんさい！（＝「されなさい」の広島弁）」と言われるに決まっている。自分自身、そもそも「人を教育する」ということの意味、あるいは本質がよくわかっておらず、学生を育てるのに「こうすればよい」という答えも見つからないし、そんな解決策など、一生見つからないのではないかと考えている。

そもそも——哲学書を読んできたため、どうしても「そもそも論」が癖になってしまっているが——、そもそ

も、「人を教育する」ことなど可能なのだろうか？ もちろん、「それは『教育』をどう定義するかによる」ということもわかっている。たしかに、たとえば知識や技術を習得させることが「教育」だとするならば、もともとその知識や技術が無かった学生が、その知識や技術を自分である程度使いこなす水準になれば、「教育できた」と、一応は言える。アリストテレス的には、水を撒くことで種子が芽吹き、やがて花が咲くように、その学生が持っていた可能性（デュナミス）が現実化（エネルゲイア）した、ということになるのだろう。

しかしそれは、その知識や技術を教授する側の人間が優れていて、無知な学生を指導し、教育に成功した結果なのだと、それこそ「偉そうに」言い切れるものなのだろうか？ 「いや、別に偉いか偉くないかは関係ないよ、

それは技術やテクニック、あるいは教員側の努力の問題だよ」という声も心の奥から聞こえてくるが、自分は何かその答えにも納得できない。結局それは、「自分の技術や努力によって、白紙に上手な絵が描けた」という程度であり、「教授する主体」と「教授される客体」を二項対立的に対置し、さらに前者を価値的に優位に置くという近代的な発想だからだ。家父長制しかり、こうした考え方が、結局は暴力やハラスメントの温床になっていると自分は考える。

こうした発想に対して、たとえば「システムは自分で自分を創り出す」という「オートポイエーシス」の見方に立つならば、教員というシステムAと、学生というシステムBは相互に自律的であり、AがBに何かを伝達したとしても、それはBにとっては一つの「刺激」に過ぎない。そして、その刺激はあくまでBのシステム、ロジックのなかで解釈・変容されて、Bはただ自らB自身を継続して産出——それは成長でも衰退でもあり得る——しているのだ、ということになる。

しかし、この考え方を全面的に認めてしまうと、なんだかモノログ的な、教室で理解されないことを前提に一人で90分しゃべっている自分の姿が浮かんできて、悲しい気持ちになる。いや、教育というのは、究極的にはそういう孤独な作業なのかもしれない。英雄シーシュポスの神話のように、尖った岩山に岩を持ち上げていって、その頂上にたどり着いたとたんに岩が落ちてしまい、それでも「よし、もう一度！」と、山の下からまた岩を持ち上げることを繰り返すように。ニーチェやカミュならそう言うだろうか。いや、そんな英雄的な行為ではなく、どちらかといえば、賽の河原で石を積み上げては鬼に崩されて、また泣きながら積み上げることを繰り返す姿のほうが、より実態に近い気がする（笑）

2 「教育」のアイデアと現実

ところで、話をアリストテレスあたりに戻すと、西洋で後世に最も影響を与えた教育者というのはソクラテスになるのだろうか？ たしかにソクラテスは「若者たちを惑わせ墮落させた」、すなわち「世間一般の常識や慣例

を批判的にとらえる視点を与えた」という罪状で裁判にかけられ有罪となり、「悪法も法なり」と自ら毒杯をあおり刑死した。相手の視野を広げるという意味では、ソクラテスほど真の教育者と呼ぶにふさわしい人物はいないともいえる。

しかしながら、果たしてソクラテスは、自分を「教育者」だと捉えていただろうか？ おそらくその答えは否である。ソクラテスはデルフォイの神殿で「ソクラテスより賢いものはいない」という神託を得て、それが真実かどうかを確かめるために「智者（ソフィスト）」と呼ばれている者たちと対話を繰り返した。その結果判明したことが、「自分が智者だと思っている者は大勢いるが、『自分が無知である』ということを知っている一点で、自分は彼らより賢い」ということだった。だからこそ哲学＝学問は、智を愛し求めるが、永遠に智＝真理そのものには到達できない途上にある営みとして、「フィロソフィー（智への愛）」と呼ばれる。そして、ソクラテスの弟子プラトンによりアテネ郊外に開かれたのが、大学の起源「アカデメイア」だ。

つまり大学は、「智者」すなわち、外部から見て「なんか偉そうな奴ら」の集まりであってはならない。

このように遡れば、大学という場の原型は、互いが無知、不完全であることを自覚したうえで、一步でも真実・完成形（エンテレケイア）に近づくために対話を続ける場所だということになる。そこでは、社会的には「教育者」や「先生」と呼ばれる者もまた、極端に言えば生涯「社会人」という範疇から外れた「一学生」であるという自覚が必要だろう。それは、たとえどれだけ社会的に成功？したと思われる実務家教員であっても、教員になった時点で変わらない。そして、対話の場が大学の原型であるならば、「アクティブラーニング」などは、某官庁がその必要性をことさら声高に叫ぶものではなく、学問の本来の姿だともいえなくもない。

さて、しかしながらよくよく考えてみると、こうした「対話により真実や完成形に近づく」という考え方は、近代哲学の完成者とも呼ばれるヘーゲルの弁証法ではないか。それは「真実や完成形にどちらがより近いか」という「ゴールへの近さ」の計測が基準となり、一方が他方を教育するという従来型の関係論を生み出しかねない。

いや、歴史は実際にその流れをたどってきた。男性、生産年齢、健全者を重視し、女性や子ども、高齢者、障がい者を差別してきた歴史は、この近代主義と深い関係がある。

正直、そろそろこうした抽象的な教育論に飽きてきた方も多いのではないかと危惧している。いや、それどころか自分自身、「結局、自分が一番『偉そうな』目線で議論しているのではないか?」という自己嫌悪感が、先ほどから生じてきているのを否認しない。その想いに耐え切れず、ふとパソコンから目をそらすと、3人の子どもたちが、ローンが残る我が家を少しずつ破壊している。やはり近代的な教育関係も必要ではないのか! 頭の中で考えている教育と、現場で生じる感情と行動の乖離に、日々悩まされながら子育てのレースは続いてゆく(ミスチル風)。

し、その瞬間が「愛」であり、それは走らない者には見えないのだと、予備校時代の英語の先生が「教えてくれた」ことを、今、有り難く思い返している。

3 ふたたび洞窟の中へ

翌朝、満員電車のなかでスマホニュースを見ていると、某大手人材関連会社が、企業の求める人材を育成できるよう大学は経営改革し、その監視機関を関連官庁に設けるよう提言したという記事が目に入ってきた。たしかに大学は「象牙の塔」や「白い巨塔」であってはならず、対話のなかだけで真実が生み出されてくるわけではないだろう。書を捨ててはならないが、もっと街に出る必要はある(いや、学生ならもっと本を読め!)。しかし、もうずいぶん前からよく聞くこの手の話題だが、これから授業で哲学の話をしよという人間にとっては、非常に気持ちが萎えた。

自分を奮い立たせるためにもう一度本稿を読み返してみると、気づいたことがある。自分は教育に対して、知識や技術の伝授以上の何かを求めながら、それが絶対的な不確実性にさらされているという現実にも身もだえしている。そして、それでもどうにかして学生との「良い社会」への志向の共有と、異質なものが混ざることによる化学反応のようなものを求めているのだと思う。その理想はあたかも、隣を走っている車が同じ速度で走った時、一瞬止まってみえるような錯覚かもしれない。しか